

## 1 男女混合グループ

文化祭の打ち上げ中、騒がしいクラスメイトを置いて、高揚感を持って彼の手を引いた。屋上への階段を駆け上がる。

高揚からか、息があがったせいかな、私の頬は赤く染まっていた。

「一目見た時から、好きでした」

彼の白い肌も夕陽のせいかな赤くなっているように見えた。

彼が文化祭前に転校してきた。私はその瞬間に惚れてしまった。彼は、誰から見てもイケメンであり、クラスで行う『ロミオとジュリエット』の役が一人決まった。

ジュリエット役を選ぶ時、私が選ばれてしまった。「私なんかでいいの……」

男子達は「君しかないよ！」と声を合わせて言った。ただ、女子からの視線は痛い程判っていた。しかし、私は運命だと思い頑張った。

放課後の練習時、私達二人は、互いに向き合いながら発声する。彼と私だけの時間の中で、私はより一層彼の事が好きになった。

「おお、ロミオ……、貴方はどうしてロミオなの。」

彼は、劇場では、役以上になりきって、感情移入して、私を強く想って死んでくれた。

そんな劇が成功し、未だ私の心の中では、熱い情がたぎっていた。

※

「ありがとう。でも、前の学校で、好きな人がいたんだ。その人はもう届かない人になってしまった。だからこそ僕は、君の想いにこたえる事はできない」

二人の間に鮮烈なる光が差しこむ。

彼は実は夕日に染まっていただけで、私の事は見えてなかった。本当に好きだった人から振られた。その気持ちは深くおちこんだ。

紫色の雲が上空を覆いはじめ、去っていく彼の背をぼやける視界にとらえながら、私は一人泣き崩れた。